

プラトン『ゴルギアス』篇の「正義」探求

吉田, 雅章

<https://doi.org/10.15017/1398592>

出版情報 : 哲学論文集. 29, pp.21-40, 1993-09-24. 九州大学哲学会
バージョン :
権利関係 :

プラトン『ゴルギアス』篇の「正義」探究

吉田雅章

1

本稿の目的は、『ゴルギアス』篇の、三人の対話者における「正義」に対する態度とプラトンによるその吟味の検討を通じて、プラトンの「正義」探究の道筋がどのようなものであつたかを確かめようとするところにある。

一体、この『ゴルギアス』という対話篇で、「正義（正しさ）」はどのように問題となつていくのか、そして問題としてどのように浮かび上がってくるのかということに、我々は先ず注目する必要がある。少なくともこの対話篇では「正義」への問いは、「正義とは一体何か」という直截な問いかけを通じて問題となるのではなく、弁論術への一見些細なとも見える問いを問うことから次第に主題化していくのである。『国家』篇とは異なり、『ゴルギアス』の中には、テキスト上の言葉として「正義とは一体何か」という直截な問いは見当たらない。この事実の持つ意味は案外見落とされてしまつていふように思わ

ある。そこにある問題の一端を確認することは、もう一つの課題である。

2

『ゴルギアス』の中で、正義の問題が、一種強烈な印象をもって登場するのは、言うまでもなく、第三の対話者であるカリクレスとの対話の冒頭である。「不正を行うのは醜いというのは、単にノモス（法、慣習）の上のことに他ならず、ピュシス（自然）においては、△余計に取る√という、ノモスの上では不正とされ、また醜いとされているこのことこそ、正しいことなのである」という「自然の正義」の主張（cf. 482C-484C）は、人を驚かせるものである。この主張はしかし、決して何か新奇な説というのではなく、むしろ「多くの人びと」（*oi polloi*）の暗々裡に抱いている見解であるとプラトンは見ていたように私には思われる。それは、「多くの人びと」が普段に抱いている「正／不正」に関する見解のいわば根拠を問い尋ねていくとき、そこに行き着かざるを得ないものとしてプラトンによって当初から見据えられ、取り上げられたのではあるまいか。そのことは逆に言えば、カリクレスの主張に端的に現れる「余計に取るという欲望の充足、そして放埒が人のよき生（幸福な生）である」（cf. 491E-492C）という人びとの理解こそが、「正義に関する理解の歪みや顛倒を生み出しているものであり、そして同時にまた、人びとのそういう理解こそ、弁論術が力を揮い、賞賛され、語る者も聴く者ともに弁論家が「何事か大きなことを成し遂げている」との評判（思い）を生んだ場所であると思われる。

そこで、先ずカリクレスに先行する二人の対話者において、「正／不正」がどのように受け止められているか、そしてそれに対するソクラテスの吟味によって何が拓かれてくるかということを中心にして、カリクレスの地点に到るまでの経緯を検討しよう。

先ず、問題の発端として取り上げるべきは、絶大な力を持つとゴルギアスが誇る弁論術の使用に当たって、彼が付した「正

しく使用しなければならぬ」という条件 (cf. 456C-457C) である。人はここに道徳家としてのゴルギアスの姿を見るかも知れない。しかしプラトンにとつては、そうではなかった。プラトンにとつて、むしろその「正しい使用(行為)」が一体に何に基づいているのが、弁論術という営みの持つ問題として問われねばならなかった。それは、弁論家が「正しさ」について、さらに「善、美」について知っているという確認から始まる (459C-460A)。そして、その「正しさについて知っている」ということが一体何を意味しているかをプラトンは厳密に問うのである。則ち「正/不正を知っている」とは、プラトンにとつて、何よりも知っているその人を行為の主体として「正しい人にする」ものであり、その「正しい人」とは、「正しいことを行うことを望んで、それを行う人」のことであった (cf. 460A-C)²¹。この箇所で示された「知と人のあり方」或いは「人のあり方と人の望み」との関係は、ゴルギアスの要請した弁論術の「正しい使用(行為)」に関して、明確な一つの論点を指摘することになっている。それは、弁論術が「望めば (ei povônto)」、あらゆることができる(あらゆることに対して語り説得することができる)もの」(cf. 456B-C, 457A-B)であるのなら、その術知を揮って何であれ行う、その人の「望み」に関して、その術知は何一つ規定するものではなく無規定であるということである。したがって、そこに付される「正しい使用(行為)」という条件は、ゴルギアス自身が例示したように、通常「正しいとされていること」(例えば、力が強くなったからといって、味方や親を殴りつけてはならないということ)を行うことに他ならず、それは術知そのものの外から加えられる制限ということになるであろう。²²

ここでは先ず、次のことを確認しておくべきであろう。弁論術の大きな力に要請された「正しき行為」とは、弁論術が「正しさ」の知であることの否定に他ならない。そして重要なのは、この知の否定が、同時に人びとの「望み」に関わる知の存在の否定でもあったという点である。というのは、弁論術の「大きな力」が「知っている人」を前にではなく、多くの聴衆を前にして發揮されるものであるなら、多くの人びともまたその知を欠いているのである。そして人びとの「望み」に関わる知の欠落というこの事態の成行きこそ、明らかに以後の『ゴルギアス』の展開の一つの機軸となるものである。つまり、

「正しい行為」とは、以上に見たような立場にあっては、通常「正しいとされている」様々なことを行うことであり、またそれによって、人びとの「望み」が制限されているのであって、プラトンが示したような、「正／不正」の知によって人びとの「望み」そのものが規定されるのではないとき、無規定なままのその「望み」とは如何なるものであるのかという点に、プラトンの「正義」への問いの第一歩は向けられていたと思われる。ゴルギアスとの対話で示されたのはここまでであり、この問題がどのような成行きを見せるかは、さらにポロスとの対話を見なければならぬ。

まず、対話の展開を簡単に確認しておこう。ポロスはゴルギアスの敗退の原因を、「正」、さらに「美や善」を知っていると云った点に認め、この知を形式的に外す。このことは、技術と迎合のソクラテスによる区分を可能にし、弁論術を迎合として位置づけることを可能にするが、しかし弁論術のソクラテスによる位置づけは、弁論術の「大きな力」を確信するポロスにとってパラドクス以外の何ものでもなかった(Cf. 461B-466A)。弁論家は、専制君主と同様に、「大きな力を持つのではないか」というポロスの反問は、さらに第2のパラドクスをソクラテスから引き出すことになる。それは、ポロスにとって「大きな力を持つこと」と同一視されている「自分に思われることは何でも行う」ことが、決して「自分の望むことを行う」ことにはならないというソクラテスの言葉であった。

さて、この(イ)「自分に善いと思われることは何でも行う」と(ロ)「自分の望むことを行う」ことの区別に関する議論(466A-468E)⁽⁵⁾は、明らかにゴルギアスの場面で取り上げられた、無規定なままの「人の望み」という問題の一つの展開である。則ちここでは、先の無規定なままの「人の望むこと」は、「自分に善いと思われることは何でも行うこと(のできる自由)」という新たな仕方で捉え直されたことになる。しかしこの(イ)と(ロ)の区別の意味をポロスは理解することができない。⁽⁶⁾ここでは、ソクラテスとポロスの両者の言葉は拮抗する場を持たず、ちぐはぐにすれ違ふ。そこに、「人の望み」をめぐる問題の核心もあるが、ここでは、両者の対立点は未だ十分に拓かれていないのである。その対立点を明らかに示すには、さらに行為の「善

し悪し」を定めるもの (*τινα ὄπου ὀπίσθη* 470B10) が必要であり、それをソクラテスは「人が正しく行う場合はより善く、不正に行えば悪い」(470C1-3) という仕方 で規定する。しかしポロスにとってこの言明は、子どもにでも反駁できる程自明なものに思われた(これが第三のパラドクスである)。何故なら「不正を行いながら、幸福な人は多い」(470D) とポロスは考えているからである。しかし彼は、その根拠を示すことができない。ポロスにあつては、「不正を犯しながら幸福である」ということは、定着する場所を持たずに、空回りをしている。というのは、「不正を犯しながら、幸福な人がいる」ということを証するために、「アルケラオスは不正を犯しながら、幸福ではないか!」と叫んでみても、それは同語反復に過ぎないからである。

さてそれでは、以上のことを念頭においた上で、このような見解が何を意味し、またそのなかにどのような問題が含まれているかを見てみよう。先ずこうした見解にとつて「不正な人」と「不正な行い」とは、どのように理解されていたのであろうか。「不正な人である」とポロスが断言するアルケラオスの行状をめぐって彼が掲げたのは、「王位を奪取する、人を誑かす、人殺しをする」という不正な行爲であつた(471A-D)。ポロスがアルケラオスを「不正な人である」(*ἀδίκος*) と言う場合、それは不正なことをしたという点にあり、しかもそれが「不正な」と言われるのは、彼がこれこれの法(ノモス)を破る行爲を行ったという点にある。とすれば、先ほどのソクラテスの「行爲の善し悪し」を定める「正しく、不正」という言葉も、ポロスにとつては「ノモスに適う、ノモスに反する」という地点から捉えられていたわけである。

無論、今アルケラオスの行状として掲げられたようなことが「不正であるかいなか」について、ソクラテスとポロスの両者の間に争点があるわけではない。ポロスにとつてはそのような「きまりや法(ノモス)」を犯したとしても、アルケラオスは自らが望むもの(則ち、先の(イ))を得られたのなら、「幸福ではないか」ということであつた。とすれば、以上のことは、(α)「行爲」の評価がそこから生まれるその点と(β)「人を幸福である」と評する点の二つが、明らかに別の観点である

ことを物語っていると云ってよいだろう。則ち、行為の「不正な」との評価は、まさにその行為が法に外れる行為であるという、その観点からの評価であり、他方これとは異なる別の観点である「専制君主として君臨し支配しながら、何であれ、望むことを行って、一生を過ごし通す」生こそ望ましい生(473D)との地点から、その人の「幸福である」との評価が生まれてくるのである。

したがって、問題は次のように集約されよう。(α)「不正な人である」との理解は、この立場では、「不正なことを行う」という点からのものであり、それは取りも直さず、「法に反する」という意味で「不正な」と呼ばれている。つまり「不正な」という評価はノモスによるものであったということである。それ故「正しさ」が直接「人の幸／不幸」に関わるものとは思われず、ノモスによって「正しさ」と「人の如何にあるか」の関係はそこには認められないということである。他方、(β)「幸福である」との評価は、「行為を評価する」のとは別の観点から出てくるものであり、「自分の思いに従って何でも行うこと」が望ましい生であるという点、つまり「人の望み」を一体何として了解しているかという点からのものであった。無論、このような立場にあつては、(β)「人の望み」である幸福は、則ち「自分の思いに従って何でも行うこと」と看做されている以上、(α)の観点(ノモスとしての「正しさ」)は、せいぜい(β)に資するかぎりで、善いと思われ、むしろ(β)の「人の望み」を阻害すると思われる「不正を受ける」ことが悪しきことであると理解されることになる。ポロスの「不正を受ける方が不正を行うことより悪い」という言葉もそこから生み出されてくるものであつた。

「不正を犯しながら、幸福である」ということがこのように肯定的に捉えられるとき、無論プラトンにとって問題だったのは、(1)「人の望みである幸福」が、そのまま「自分の思いに従って何でも行うこと」とされている点、そして(2)これと密接な関係にあるものとして、「正しい人」を捉える観点が「正しい行為」(ノモスに従う行為)にしかなく、しかもそれによって「正しさ」は、人のあり方には関わらないものとして捉えられているという点であつた。

それ故プラトンはこれに対して、ポロス説の反駁という仕方では、正義と幸福の問題が焦点を結ぶ場所が何処にあるかを示

していく(477A-479E)が、その道筋にあることについて最後に触れておきたい。ポロスに対する反駁は、「不正な」と捉えられる行為に対する「醜い」という、ポロスの評価の承認に依拠して進められるが、大切なのは、反駁のためにソクラテスによって持ち出された「美／醜」の基準としての「善／悪」と「快／苦」である。この基準による反駁の意味は、「正しき」から切り離された「人の望み」とは、結局「欲望の充足」に他ならず、その場合の「善いと思われる」とは「快い」に他ならないという点にある。これが、いわばポロスの説を背後から密かに支えていたのであり、ソクラテスはポロス説の中に密かに侵入していた「快」を、これまた密かに(?)取り除くことによって、「正、善、美」といった価値の本来語られるべき場を指し示したのである。^[12]

3

以上に見てきた、ゴルギアスとポロスの「正義」理解の問題は簡単に次のように言えよう。先ず、ゴルギアスとポロスの両者ともに、「正／不正」の問題が、本来「正しい人／不正な人」の問題としてではなく、行為に対する評価の問題であって、「正／不正」の根拠をノモスに置いて捉えている点を確認しなければならぬ。そしてこのことと表裏一体の関係にあるものとしてプラトンが取り出しているのは、「正／不正」がそのように捉えられているとき、「人は一体何を望むか」という問題の成行きである。このような立場では、「人の望み」はまったく無規定なままに、しかしそれと気づかれず暗黙の内に前提されているのである。そしてカリクレスのいわゆる「自然の正義」の立場とは、以上のような立場がそれとして問うことなく、暗黙の内に前提している「人の望み」をより鮮明な仕方であり出したものであると思われる。

カリクレスのいわゆる「自然の正義」とは、「より優れた者がより劣った者を支配し、より多くを取る」とあるが、これはよく知られているように、ピュシスとノモス(自然本性と法)を対立するものとして捉える理解に基づいている。この

対立を用いて、「余計に取ること」が不正であり、醜いというのは、ノモスの上のことであり、ピュシスにおいては、それが「正しいことであり、美しいことである」とカリクレスは言う。これは無論、ポロスが反駁された原因を取り除く手立でもあった。

では、このような主張はどのように先のポロス（多くの人びと）の立場を継承したものと言えるのだろうか。

カリクレスはノモス―ピュシスの対立を持ち出すことによって、通常人びとが「不正な」とか「醜い」という言葉によって自他の様々な振舞いを評価しているその全体を、「ピュシスに反する単なる人びとの取り決めに他ならず、愚にもつかない無価値なもの」(932C7-8)として放擲するとき、それは当然これまで見てきた、人びとの持つ(α)の観点(ノモスによる行為の評価)を、不正は醜いということも含め、棄却することを意味する。それは例えば「味方や親を殴りつける」「人を誑かす」のは「不正である」とか、また「醜い」とかいった言葉の効力を失わせ、その使用を封じることであろう。則ち、一方で「くは不正」とか「くは醜い」という言葉が総じてノモスと捉えられるとき、それは自己の他者に対する振舞いを制限しているなんらかの力と看做され、しかも他方それには何の根拠もなく、何の価値もないというのが、人びとの持つ(α)の観点に対するカリクレスの継承の仕方であったと言えよう。

このように「正／不正」「美／醜」を他者に対する振舞いの制限として捉え、その制限を無効にすることで、これと全く表裏一体の関係にある、(β)の観点である「人の望み」は、「より多くを取ること」として語られることになる。則ち、ポロスにおいて「自分に善いと思われることは何でも行える自由」は、ここで先ず無制限に「より多くを取ること」として捉えられることになるのである。ところでこれは当初、対他関係において語られ、「より優れた者がより劣った者を支配し、より多くを取る」ことであったが、しかし一体「より優れた者」とは誰なのか、また何に関して、より優れた者が支配し、より多くを取るなら、それが正しいことになるのかは、まさに問われねばならないことである(488B から 491C)にかけての対話を参照されたい)。そしてこの問いに対する答えが「国家公共の事柄に関して、支配する者が支配される者より多くを取ると

というのが「正しいことである」(491C-D)に到るとき、ソクラテスの「その支配する人は、自分自身を支配しているのか」(491D)という問いを転換の契機として、「それまで對他関係で語られていた「より多くを取る」とは、再度「欲望の充足」放埒」(ἐπιθυμῶντα αὐτῶν αὐτῶν ἐπιθυμῶντα ἑαυτῶν)として捉え直され、それが人のアレテーであり、幸福であるとされるのである(491E-492C, 492E)。そして「人の望み」が「欲望の充足」とされるとき、「幸福に生きる(善く生きる)ことは、快く生きる」(494C3, D7) 以外ではなくなる。

さてでは、我々はこの転換の持つ意味を考えて見なければならぬ。「より優れた者が多くを取るのが正しい」と主張するこの説は、既に見たように、同時に「他者に対する振舞いを制限するなんらかの力」を一切無効にしているが故に、他者に対する振舞いという点でこれを覆すことは不可能である。だがこの説は、ノモスとしての「正しさ」を棄却するその一点で、その裏返しに主張されているものであつて、この「優れた者」がそれに従つて生きるといわれる「自然の法」¹³の何であるかが明示されているわけではない。とすれば、まづもつて、この「優れた者」の、他者に対するあり方や振舞いではなく、その人自身の「あり方」、則ちその人が「優れている」という場合の、「その善さ(優秀性)が一体何によるのか」が問われねばならないであろう。ソクラテスによる問いの転換はそこへ向けられていたのであり、そこに示されているのは、その人自身の「あり方」が、まさにそのまま「欲望」であるということである。他者に対する振舞いの制限としてのノモスの棄却とは、まさにそれをあらわにするためのものであつたと思われる。

さてそれでは、人の望みを「欲望の充足」とすることは「正しく」、また「美しい」と言えるか。その点に関してプラトンが指摘した一点を確認しておこう。人の望みを「欲望の充足」とすることは、「幸福に生きる(よく生きる)」ことが「あらゆる欲望を持ちながら、これを満たすことができ、快く生きること」であるとすることに他ならない。では「疥癬病みの生」はどうかとソクラテスは問う。そのような掻き続けながらの生も「快い生」ではある。だが、それを「幸福な生」と言うことはできるのか(cf. 494A-E)。カリクレスは「そんなところに話を持っていつて恥ずかしくないのか！」(494E7-8)とソクラテ

スを責めるが、このカリクレスの非難の言葉自身が、既にそのような生が「醜い生」であることを認めているのである。そしてその生が醜いとされるのは、そのような欲望の充足（＝快）が身体には悪しきものだからであろう。人がそのような疥癬病みの生を「快き生ではあれ、醜い生」として選びとらないのなら、このような「美／醜」「善／悪」は、カリクレスの言う意味での自然本性によるものでもなく、さりとてノモスの上のことでもなく、まさに「ある」と人は認めているのであり、その意味で我々の生を最も原初的な場面で限定しているものなのである。¹¹⁾

以上のように見てきたとき、ゴルギアス↓ポロス↓カリクレスという吟味の過程におけるプラトンの「正義」探究の途は、差し当たり次のように纏めることができよう。先ず、多くの人びとの相互関係のなかで作動している弁論術という場における「正義」の捉え方をゴルギアスにおいて問題の発端として確かめ、さらにそのような多くの人びとの「正義」に対する態度がどのようなものであるかをより広範囲な視野からポロスとの対話によつて描き、そしてさらにその態度の持っている意味を、いわば積極的に肯定するとすれば、どのようなものになるかをカリクレスの主張として取り上げ吟味するという途であつたと思われるのである。

4

カリクレスとの 500A までの議論で、カリクレスの「快樂説」は成り立たないことが示され、「善」と「快」とは区別されることになる。しかしここまでのところ、「快」とは別のものとされた「善」について、それがどのようなものであるかということには未だ触れられていない。それを示していくことは同時に、放埒に、あらゆる欲望を満たしながら「快く生きる」ことが「幸福に生きる」ことでないなら、「幸福に生きる」こと＝善く生きることはどのようなことでなければならぬのかを語り明かすことである。

さて『ゴルギアス』で、これに与えられた回答は、周知のように、凡そすべての存在者について、そのものを善きものたらしめる「規律・配置」(τάξις)や「秩序」(κόσμος)の存在を指摘することであった。そして様々なものや身体の場合と同様に、魂の場合にも、このような「規律・配置」や「秩序」を持つとき、善い魂と言われ、それが「正義」であり「節制」であると語られることになる (cf. 503D-504D)。このことの持つ意味は、既に多くの人によつて様々な観点からの検討が加えられているので、ここでは措くとして、丁度その直後の箇所注目したい。そこには、これまで見てきた「人の望み」と「人のあり方」の関係が如何なるものであるか、明らかにされているように思われる。

その箇所でもなお、「身体と魂の類比的な語り方」が続けられているが、そこでは先ず身体について、次のように語られている。

「欲望を満たす (τὰς ἐπιθυμίας ἀροντιμῆσαι) ということも、例えば飢えていて食べるとか渴いていて飲むという場合に、それが健康な人であれば、大抵の場合、医者はその人が望むだけ食べたり飲んだりするままにしておく (φάγειν ὅσον βούλεσθαι ἤ... μείν, ... ἐσθίει) が、病気の人であれば、いわば如何なる場合にもその人が欲望するもの (ὅν ἐπιθυμεῖ) を満たすのを許さない」 (505A6-9)

この文章が如何なることを語っているのかを検討してみよう。先ず「欲望を満たす」ということは、そこに示されているように、具体的には「飢えていて食べる」、「渴いていて飲む」ということであるが、その場合、健康な人であれば、医者は大抵「その人が望むだけ、食べたり飲んだりして欲望を満たすままにしておく」と言われる。それはその人の「健康である」ことそのこと、そして健康である人の望みが、人の「身体の健康」にとつて、欲望をどれほど満たせばよいかの、いわば基準になっているからである。他方、病気の人の場合、その人の欲望するものをその人が満たすことを医者が許さないのは、「病気である」というまさにそのことによつて、どれほど満たせばよいかの基準が、いわば失われ破壊されているからである。このことは次のことを明らかにしていると思われる。身体にとつて「どれほどの欲望の充足がよいか」ということは、

健康な人（健康であること）の「望むだけ」がその基準になる。健康な人にあつては、「健康である」というそのことのように、欲望の充足に関する基準があり、その人の「望む」かぎりのものがそのまま、人の「健康である」こと、そして健康を保持し増進させるものであるのに対して、病気の人の欲望は、例えば熱や病変によって現れるいわば偽りのものであり、それに応じて「どれほどの充足がよいか」についてのその人の望みも、偽りの現れとなるのである。

とすれば、以上のことは、「望む」ということを語り得る場が何処にあるかを正確に示していると言わなければならない。健康という身体のアレテアがあるとき、その場合にまた「望み」も本来的に語り得るといふことである。則ち、身体のアレテアがあるとき、その人が身体にとつて「最善とと思う事柄」は、その人が身体にとつて「望む事柄（健康であること）」とイコールになるが、病気である（身体のアレテアを欠く）場合、その人が身体にとつて「最善とと思う事柄」は、決してその人が身体にとつて「望む事柄（健康の恢復）」とイコールにならず、ずれているといふことである。¹⁶⁾

勿論、以上は身体の場合で語られたことであるが、そのような検討の上で、翻つて先の(1)「正／不正の知」と「正しい人」をめぐる議論や(2)(イ)「自分に思われることを行う」ことと(ロ)「自分の望むことを行う」ことの区分の議論を顧みるなら、今語られた箇所へとそれらの議論は収斂し、またそれらの議論はこの箇所を俟つてその意味があらわにされよう。則ち、(1)の議論で、「正しい人は正しいことを望んで、これを行う」という言葉において、人の「あり方」とその人の「望み」の不可分な関係が、アレテアによつて規定されていることが、先の言葉のうちに正確に示されている。さらに(2)については、(イ)と(ロ)の区別は、そこで「自分」と言われた行為の主体のあり方がアレテアを欠くとき、(イ)はまさに「欲望の充足」であつて、それは決して(ロ)の「自分の望むことを行う」ことにはならず、(イ)がそのまま(ロ)であると言えるのは、行為主体がアレテアによつて規定されている時であることが示されているのである。

しかし以上の、身体の場面に半ば依拠して述べた事柄は、もう一度改めて考え直してみる必要がある。というのは、今の箇所の議論に続いて「魂の場合」が取り上げられるとき、そこには必ずしも単純な類比を許さない事情があるように思われるからである。身体の場合に引き続き、魂の場合が取り上げられるとき、そこでは健康に比せられる魂のあり方については触れられず、ただ病気に比せられる劣悪な魂の場合のみが語られる。そしてその場合、身体と同様のやり方があるとされるが、しかしそこで注目すべきは、身体の場合と異なり、一体誰(何)がこの「劣悪な魂」を欲望の充足から遠ざけるかが明示されていないということである(文法的に言えば、先の身体の場合の医者に当たる主語がない文章となっている)。つまりそこでは「その魂を欲望から引き離し、それがより優れたものとなる以外のことをするよう解き放つことのないようにしなければならず(*eiroyev...dei...kai iñ entipeteu*)、その魂が欲望するものから引き離しておくことが、懲らすということ(*kolafev*)である。」(505B)と言われているが、その場合、主語が明示されないことの意味は何であろうか。

この「懲らす」という言葉に着目して、ポロスとの議論(476A-479E, esp. 476D-E, 478A-E)を顧みてみよう。そこに見られる「まっとうに(*opha*)懲らすものは、正しく(*dikaios*)懲らす」「まっとうに懲らすものは、何らかの正義を用いて(*dikaiosynē tivē kōlajevōi*)懲らす」との言葉は、今簡単に言えば、「懲らす(罰する)」という営みがそれとして成立するには、そこに「正義」のアレテーがなければならないことを物語る言葉であると思われる。すると、今問題の箇所においてもこのこと同様に、「懲らす」という営みが成立するには、正義が必要であり、その営みの主体として正義のアレテーをそなえた「正しい人」を考えるべきなのであるか。実際、ポロスとの議論の当初において、身体と魂に関わる技術知と迎合が区別されたとき、正義(司法術)は、身体に関わる医術に応じるものとして、魂に関わる技術知とされたのであり、そ

の点から見ても、正義、ないし正しい人を、その主体（主語）としてここに読み込むことは一見許されるかに思われる。¹⁷

しかし、今我々が 506C-530C において、カリクレスとの対話の要点をソクラテスが独白という仕方ですべて直す部分に目を向けるとき、各々のもののアレテーがそれによつてそなわる「秩序や調和」は、魂の場合に先ず「思慮節制」とされているが、これに伴つて語られる正義の議論は、既に指摘されているように、「ふさわしいもの」(τὴν ἰσοσύνην)を媒介とした、それ自身確かに極めて貧弱・脆弱なものであることを認めざるを得ない。¹⁸特に注意すべきは、「思慮節制のある人は、神々に関しても人間に関してもふさわしいことを行う」(507A, B)、そして「人間に関してふさわしいことを行うのは、正しいことを行うことであり、正しいことを行う人は正しい人である」(507B)という議論である。この議論の後半部分は、他の対話篇に訴えずとも、既に我々が見てきたところからしても、二つの面で脆弱なものである。則ち、(1)「正しいことを行う人は正しい人であると言われている」点と、しかも(2)「その正しい行為が対他関係で述べられている」点である。この議論の前半部分が「思慮節制ある人」の行いを語っていることで、その脆弱さは和らげられようが、そのことは同時に、正義のみならず、その他のアレテーも含めて、節制ある人はその一切をそなえた意味で、完全なよき人であり、幸福な人であることを語るその一部として、明らかにつけたりの観を否めない。その後も「正義」は「思慮節制」と並び、言及されるが、今我々が検討してみなければならぬのは、その正義と思慮節制の関係である。

確かに、欲望の飽くなき充足と放埒をもつてアレテーとし、よき生（幸福な生）もそこにあるとするカリクレスの快楽説を批判するとき、そういう生の対極にあり、それに対峙するものとして、「思慮節制」というアレテーが先ず登場したことは、或る意味で極めて自然なことだとも認められよう。ホワイトは、後に『国家』において大々的に正義が探究される前に、思慮節制のアレテーが確立されておく必要があると、正義に関する論証は『ゴルギアス』の主題ではなかったことをかなり詳細な議論で示そうとしている。彼の議論は、かなりの点で肯定できるものであるが、¹⁹我々が3節までに見たように、カリクレス説へ導いてきたものが、人びとにおける「正義」理解の歪みや顛倒の由来を求めてきた結果であり、その結果としての「人

の望み「欲望の充足」というのがプラトンの問題であつたとすれば、やはり彼の言うことに全面的な賛意を示すことはできないであらう。

一体、思慮節制に関わる事柄は、実はカリクレスの快樂説批判において始めて登場したものではない。先に触れたポロスとの対話において、魂の劣性として「放埒」が掲げられたとき、問題の射程の中に入ってきているのである。特に我々は、「裁きは放埒と不正からの解放であり、人びとを思慮節制あるものにし、より正しい人にし、魂の劣性を癒すものとなる」(478A-B, D)と語られる言葉に注目しよう。つまり、ここでは「裁き」(δικη)、「懲らすこと」(κολλάσειν)は明らかに、「放埒」(ἀνομοσία)と「不正」(ἀδικία)の双方に関わり、その双方を癒すものとして考えられている。このことと、我々が既に見たカリクレスの「幸福＝快樂」説が当初、正義をノモスとして棄却し、それに代えて「自然の正義」を主張するとき、その必然的な結果として出てくる主張であつたことを考えあわせるなら、我々は次のように言うことが可能であると思われる。「放埒」に対峙するものとして「思慮節制」を確定したとき、残っている問題は、むしろ「欲望の充足」が単に「思慮節制」に反するものであるばかりではなく、それがまた「不正である」ということを解き明かすことにあると。つまり、それは(1) *κολλάσειν(δικη)* - *ἀνομοσία* という線と(2) *κολλάσειν(δικη)* - *ἀδικία* という線の二つで問題になることがあり、したがって(1)の線上の問題が一旦 *ἀνομοσία* - *σάφροσύνη* との対立で捉えられたときの問題には答えているが、しかし(1)の問題はそれだけでは不十分であり、——というのは、先に見たように、*κολλάσειν(δικη)* はまさしく *δικαιοσύνη* によつて、まつとうに果たされると考えられているからであるが、——(1)の問題は、さらに(2)の問題としても答えられねばならなかつたということである。繰り返せば、「欲望の充足」という「放埒な生」が「幸福な生」ではなく、「思慮節制のある生」(節度ある生)がそうだけというだけでなく、「欲望の充足」という「放埒な生」はまさに「不正な生」であることが示される必要があつたということになる。

とすれば、我々は先の「魂の場合」を語る文章に戻つて、むしろ先の文章において主語が明示されていないという点こそ、

問題であると考えるべきであろう。つまり我々は、むしろ逆に理解しなければならないのではないか。というのは、劣悪な魂（放埒で不正な魂）であるかぎり、「その魂を欲望から引き離し、それがより優れたものとなる以外のことをするよう解き放つことのないようにしなければならない」と言うとき、その主語が示されなかったのは、「引き離し、解き放たないようしなければならぬ」ということが言えなくなっているのが、この劣悪な魂であり、それは正義を完全に失っているという意味で、「懲らす」ということが最早成り立たなくなっていることを語っているのではないか。したがって、欲望の充足＝放埒の生が、単に思慮節制＝節度ある生との対比において否定されるだけでなく、それがまさに正義を完全に失ったという意味で「不正」であり、それを如何に否定できるかという点に問題は懸かっていることを示しているように思われる。

以上見てきた点からすれば、我々はこのような『ゴルギアス』の「正義」探究が、『クリトン』の先の言葉を出発点に取りながら、『国家』において、第2巻の冒頭のグラウコンのギュゲスの指輪の話に見られる人びとの「正義」理解(358E-360D)へと先ず収斂し、そこからさらに「正義と不正のそれぞれは何であるか、それぞれが魂のうちにあつて、それ自体として如何なるちからを持つのか」(358B)という問いを形づくる仕方だ。「正義」そのものへの探究にプラトンを向かわせたものであることを確信することができるように思う。

註

(一) N. P. White: "Rational Prudence in Plato's *Gorgias*", *Platonic Investigations* (Ed. D. J. O'Meara), The Catholic University of America Press, 1985, pp. 139-62. 松永雄二『知と不知』(東京大学出版会、1993)の第八章、第十章参照。なお、私はこの稿を成すに当たって、この書に収められた論文に数多くのことを学んでいる。

(二) この箇所を持つ意味、並びに『ゴルギアス』第一部全体の構造については、拙稿「正義と知」(森俊洋・中畑正志編『プラトン

的探究』九州大学出版会、1993、pp. 43-60) において論じた。

(3) ゴルギアスは、弁論術を他の競技的技術や能力と全く同様のものと看做しているから、それらの技術に付けられる「正しい使用」という条件は、また「弁論術」にも付けられねばならないと考えている。なお、この点については前掲論文「正義と知」の註(7)も参照。

(4) この点に関する、より詳細な検討は、前掲の拙論「正義と知」(pp. 34-8) を参照されたい。

(5) この箇所の議論、特に目的論の構造をどのように理解すべきかは、別の機会に詳細な検討を必要とする。この点については、岡部勉「Gorgias 467c5-468c8」(『古代哲学研究』XXII, 1990, pp. 23-30) がかなり詳細な検討を加えており、私も現在のところ、岡部氏とかなり近い理解をしている。

(6) 468E, 469C, 473C-Dのポロスの言葉は、いずれもそのことを示している。

(7) ポロスとの対話において、ソクラテスの語る三つの主題、弁論術の迎合への位置づけ、善いと思われることを行うことと望んでいることを行うこととの区別、正しさと幸福(善)との結び付き(不正を行う方が不正を受けることより悪いなど)は、すべてポロスにとってパラドクス(常識に反するもの)として語られている。今、ここにその詳細を尽くすことはできないが、ポロスとの対話におけるこの三つのパラドクスは、「よく生きることに関わる根源的な問題場面からする一連のものであり、まさに多くの人びとの思い(常識)に反するものとして、ソクラテスによつて提出されていることの意味を我々は注意深く見極める必要がある」。

(8) アルケラオスを証人とするポロスの反駁に対して、ソクラテスは「何処から」(πόθεν, 471D8) 反駁されてしまっていると考えるのか尋ねているが、ポロスの反駁はまさに何を根拠にしているのかが見えない。οὐ πολλοῖς の見解(評判)は、基本的に言つて、「多くの人びとがそう言っているから、そうである」という仕方、堂々回りをしているものであろう。

(9) ポロスは、アルケラオスの身分と彼の弟の王位継承権について、κατὰ τὸ δίκαιον (471 A6, C2) という言葉を用い、双方に應じて τὰ δίκαια τοῦτευ (471A7) と δίκαιος (471C3) という言い方をしている。κατὰ τὸ δίκαιον の用法はそれぞれ、「アルケラオスは本来なら当然、アルケタスの奴隷であった」「王位は本来、彼の弟のものであった」ということであるから、「これは「法とか世の慣習に従えば」ということを意味するものであると考えられる。それぞれに応じて用いられた τὰ δίκαια τοῦτευ

- と *δυνατός* も「アルケタスに奴隷として仕えること」「本来しなければならぬように、弟を育て上げ、(与かっている)王権を返還すること」と理解されるから、同様に考えねばならないであろう。この *κατὰ τὸ δίκαιον* という言い方は、プラトンの対話篇にはあまり見られない言い方である。『ソクラテスの弁明』に「*παρὰ τὸ δίκαιον* とどう言い方とともに登場する(32A7, 33A3, 35E2)。いずれも法との関係で語られているように思われる。この点については、*αὐτῶν*に G. X. Santas: *Socrates, Philosophy in Plato's Early Dialogues*, Routledge & Kegan Paul, 1979, pp. 228-9 を参照。なお前掲の岡部論文の註(3)には「sentence adv. (adverbialsも含む)の該当箇所として、ここに取り上げた *κατὰ τὸ δίκαιον* の双方の箇所も掲げられているが、今述べたような理由からも、この箇所はむしろ外すべきではないかと考える。
- (10) ポロスとの対話において、この点を質すソクラテスの問いは「幸福とは何か」ではなく、「誰が一体幸福なのか」という問いである(472C-D)。
- (11) ポロスにとって「正しく/不正に」行うかどうかは、どちらでもよいものと看做されている(469A)が、それは(β)の人の望みと同一視された「自分に善いと思われることは何でも行える自由」が確保できるかぎりにおいて、つまり「善」という点からのものであるが、「不正な」とされる行為が「醜い」と評価されるかぎりにおいては、「不正な」とは彼にとってなお意味を持つものであった。
- (12) 第二部の「ポロスとの議論」の内、特に「不正を受ける方が不正を行うより悪い」とのポロスの主張(「多くの人びと」の理解)を覆す、ソクラテスのエレンコスの意味とエレンコスの有効性をめぐる議論については、拙稿「不正とポロス——*Gorgias* 474C-475E6のエレンコスの語るもの」(古代哲学会編『古代哲学研究』XXIV, 1992, pp. 1-11)を参照されたい。
- (13) 483Eの「優れた者は、確かに法にも従っている、しかしその法は自然の法であって、我々が立てる法に従っているというわけではない」という言葉を参照。
- (14) この箇所も含め、これ以降の「カリクレスの快楽主義」批判の詳細については、本誌第6輯(1970)に掲載されている、伊東斌「プラトン『ゴルギアス』における快楽——善考察のための予備的段階——」が是非参照されねばならない。
- (15) 最も正確な指摘は、前掲の松永雄二『知と不知』に見られる。
- (16) 先の 466A-468E における(イ)と(ロ)の区別に関連して、*ἐπιθυμία* と *βούλησθαι* の用語法上の区別が盛んに論じられている。大

勢は用語法上、区別がないという方向である。例えば、Ch. Kahn: "Drama and Dialectic in Plato's *Gorgias*", *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 1, (1983), pp. 117-8, n. 67 は、 $\epsilon\pi\theta\upsilon\sigma\epsilon\iota\upsilon$ と $\gamma\omicron\sigma\tau\alpha\lambda\epsilon\omicron\theta\alpha\iota$ は side by side に用いられていると言うが、それはこの箇所を持つ意味を完全に見失わせるのではないかと思われる。

(17) 技術知と迎合の区別の箇所は勿論、一見したところ、そう見えることであって、本来はソフィストの術と弁論術があたかも本物であるかのように振舞うことで、立法術と正義(司法術)を覆い隠しているという点にそのポイントがある。

(18) 前掲の *White* の論文 (p. 158-9) を参照。

(19) *White* の論述(前掲の論文)は、大半がカリクレスの主張とソクラテスによるその吟味に考察が向けられており、カリクレスの主張へ到るまでの経緯がややなおざりにされているように思われる。

(昭和五十二年本学大学院博士課程修了・長崎大学教養部助教授)